
プラチナ

トッコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラチナ

【Nコード】

N8409P

【作者名】

トッコ

【あらすじ】

いつもと変わらない一日をこれまでと変わらずスタートしたつもり
の主人公。

異世界へ飛ばされて、なんだかよくわからないままに、助けた（らしい）人はどこぞの国の騎士様で、御礼をしたいと半ば無理矢理、王宮へ連れていかれてしまう。

？ 始まり（前書き）

異世界トリップもの。

なるべく明るくサクサク主人公には頑張ってもらいたいと思います
が、この主人公、一人でぐるぐるしちゃうかもしれません。

らぶらぶハッピーエンドを目指します！！

？ 始まり

あの日。

独りになった、

独りだと知ったあの瞬間。

誓ったことは、今でも褪せることなく、私を動かす力になってる。

ただ…

あの時から変わらずに、時折起こるこの痛みを、どう扱ったらいいのか分からなくて、酷く戸惑っている。

ただ、それだけ。

「ふわぁ……」

もぞもぞ。

ベット横のローテーブルに手を伸ばし、4：29を指す目覚ましを解除する。

私は寝起きがいいのだ。

実際、この目覚まし時計が鳴った音なんて、買った時に確認して以来、一度も聞いたことがない。

……いや、つい昨日、時計をテーブルに置きそくなって起きぬけに踏ん付け、5分以上鳴り続けたんだった。

治ってよかったけど、盤にひび割れ出来てしまった。

買い替えようかな。

まあ。とりあえず、やるべきことをやってから考えよう。

1DKのこの部屋は、安い割にはしっかりしてて住み心地もまあまあだけど、やっぱり12月の日の出前は寒い。

軽くベツトの上でストレッチをして、体をほぐしてから動き出す。
吊りやすいんだよね。

顔を冷水で洗って、髪を結わう。
寝巻の格好そのままに、ダッフルコートを羽織って、まだ暗い玄関の外へでた。

誰もいない道を街灯に照らされながら歩く。踵から地面に着くように心掛けて、なるべく大股で一步一步確かめるようにいつもとおなじ道をいく。

アパート一階の部屋から、比較的狭い路地を抜け、商店街を避けて、小さなこの町を軽く一周。

それでも1時間弱は掛かるこの散歩を、一人暮らしを始めてから2年続けている。

一人暮らし自体、初めは反対されたのだ。最低このくらい出来なければ納得してくれないだろう。

まあ、こんな人気のない時間にやっていることを知ったら、それこ

そ連れ戻すと言われそうだが。

とはいえ、日の出前の暗闇は、いかに暗いとはいへ全く不安にならない。

未だ白んでもいない空も清んだような空気も、夜のそれとはまったく違うものに感じるのだから不思議だ。

冷たい風が耳に当たってジンジンするが、さして気にもせず足を進める。

携帯も何も持っていないが、それもまあ。

代わりに護身のためと歌でも歌ったら、それこそ、近所迷惑。というよりこちらが不審者か、と。

背筋を伸ばしてスタスタとね。

道程を半分ほど行ったところで、寂れた公園をショートカットする。

垣根も木も無いような開けた公園だから大丈夫。

私だって、一応女としての危機感くらい持ってますよ。

ここには猫一匹隠れる所ありません。

………って、あ。

居ました、猫。

って、言っても所詮は猫ですよ。気にするほどのものじゃあ、ありません。

…なのに、なんだろう。背筋がゾワゾワするこの感じは。

目の前のそれは、公園中央で立ち止まり、私を見つめてくる。

野良にしては艶やか過ぎる黒。瞳は満月のような黄金色だ。

寂れた公園にはあまりに不釣り合いに見える、華奢な脚は、まるで汚れた地面との接面を少なくしているかのようにピンと伸びている。

ただ、キレイだ。と思うにはあまりに異質に見えたそれに凝視され、一瞬、自分がどこにいるのか忘れて固まってしまった。

砂の巻き上がる音もブランコの軋む音も何も聞こえない。闇に浮かび上がるような二つ光が私を捕らえ離さない。

……その光が歪んだ。

そう思った時にはもう、その呪縛から解放されていて、黒い尻尾が低い柵の向こうへ消えていくところだった。

私は、すぐに動くことも出来ず、ただ呆然と足跡も残っていない地面を見つめていた。

笑った？

？ 日常（前書き）

文章書くのって、難しいな！

読んでくださる方々、読み苦しくても、温かあく見守ってくださいると嬉しいです。

そのうち、上達していくと……うん。

？ 日常

アパートに戻って、扉を開けようとポケットを探っていると、部屋から電子音が漏れて聞こえてきた。

いけない、ぼーっとし過ぎて、いつもより大分帰ってくるのが遅れたようだ。

急いで鍵を開け、キッチン横の棚にある受話器を手にとる。

「もしもし。おはようございます。」

毎日6時。それこそ天気なんか関係なしに掛かってくる電話。

私を…心配する声。

「はい、朝ごはんの後に必ず。…もちろんです。薬も欠かさず。…はい、有難うございます。」

「はい、それでは、失礼します。」

ツーツーツーという聞き慣れた音が、いやに部屋に響く。

はあ。

この度に、私は何時になったら、本当に独り（・・・）で生きていけるんだろうかと思う。

私はもうこれ以上誰かに甘えている訳にはいかないのに。

持ったままの電話も、着ている服も、この部屋も。多くが未だ完全に自分の手で手に入れた、自分のもの、でないことに、酷く落ち込んでしまう。

今日なんか、猫にビビっちゃったし。

黒猫に横切られちゃった、不吉だッ…なんて、しょうもないこまで浮かんでしまう。

なんとも軟弱な精神か。そんなんでは、独り立ちなんて夢のまた夢、連れ戻されてしまうというに。

でも…あの威圧感は何だったんだろう。

タダモノならぬ気配というか、オーラというものがあつたな。

私には…ないな。

猫以下の存在感ってこと？

…いやいや、そんなことは。

悶々としているうちにタイムリミットが迫って来ていた。

うぁっ！急がねば。

こうして、今日も一日が概ねいつも通りに始まった。

仕事から帰って来た私は猛烈に疲れていた。

いつもならまず有り得ないようなミスを連発し、あげく、何も無いところで躓き、コーヒをオフィスのカーペットにぶちまけるという失態。

周りの苦笑いと同情の目が痛かったッ！！

どうしたんだ、私。

あんなローヒール履いててよろけるわけもなかりうに。

しかし何と言うか…
集中出来なかったのだ。

ふとした瞬間、今朝の猫の瞳が頭に浮かんで、思考が持つて行かれてしまい、目の前への注意が疎かになった。

うう……

やはり黒猫の呪いか？！

等と、失敗の責任をふざけたところに転嫁したい程度には落ち込んでしまう。

すっかり冷たくなっているベットに俯せに倒れ込む。回転の鈍くなった頭が冷えて気持ちがいい。

…いいや、今日は取りあえず寝てしまおう。

厄日かなにかだったに違いない。

明日、名誉挽回するべく頑張ればいいさ。

と、なんとか思考を上向き修正しつつ、ちょっとよれたスーツから着替え、化粧を落とすと、早々にベットに潜り込んだ。

若干見づらくなった例の時計は9：00を少し過ぎたあたりを差していた。

？ 日常（後書き）

文章ちゃんと繋がってる？？

えっ、変？

そうかな…そうだよねえ……

皆様、ご指導のほど、よろしく願います！！

？ 困惑と旅立ち（前書き）

本日二話目 ！！

？ 困惑と旅立ち

ジリジリジリジリジリジリジリ……

あまりに耳障りな音に目が覚めた。

右耳すぐそばのローテーブルで、小刻みに震えながら鳴るそれを見て、げんなりした。

…まだ夜中の1時じゃん。

意外に響く金属音に眉をひそめつつ、目覚ましの頭部分を叩いて停止させる。

夢も見ず熟睡していたが、鳴り始めてからさほど時間はたっていないだろう。

お隣りさんに迷惑が掛かっていないことを祈りつつ、再び毛布に包まる。

もう、4時間近く眠ったようだが、まだまだ足りない。

昨日のダメージは大きいのだ。

すぐさま襲ってくる睡魔に身を委ね、さあ、夢の世界へ！と意識がまどろみかけたその時。

ジリジリジリジリジリ……

再び鳴りだすポンコツ時計。

……電池抜いておくんだった。

二度の睡眠妨害に、さすがの私も、苛立ちを抑え切れず、先ほどよりいささか乱暴に叩くと、電池を抜き、盤が下になるように時計を倒した。

すぐに買い替えなかった自分が腹立たしい。

仕方なく、携帯の目覚まし機能を使おうとベットをでて、玄関先に放置してある鞆を取りに行く。

別に無くてもし起きられるが、人間万が一ということもある。目覚ましは欠かせないのだ。

裸足で歩くフローリングの床はひどく冷たくて、殊更ポンコツ目覚ましに恨めしく思われる。

爪先立ちぎみで、胸の前で組むようにした腕を摩りながら、鞆を取って返すと、ベットの左手、ちっさいベランダに続く窓のカーテンが全開になっていて、満月がくつきり見えた。

アパートを囲むように私の背丈（154？）より少し高い塀があるので、道からまる見えというわけではないが、女の一人暮らしで、これはちと無用心だ。

何で今まで気付かなかったかな、間抜けだな、自分。

等と思いつつ、早速カーテンを閉めようと窓に近付いた。

その足が、止まる。

窓の外、地面からさほど高くない位置にある双つの月がそこにあった。

相変わらず美しいその肢体を私に向け、まっすぐ見つめてくる黒猫に、なにか言い知れないものを感じて、足がすくんだ。

この猫、絶対普通じゃない。

背中に伝う汗に今朝の感じたものは思い違いではなかったと実感した。

若干見上げるようにベランダに座るそれは、流れるような動作で、一歩踏み出すと、トンツと前足を窓にかけ、ミャアと可愛らしい声で鳴いた。

……開けるといいたいのだろうか。

心臓が早鐘のようにバクバクと脈を刻む。開けるつもりはないが、このまま突っ立っている訳にもいけないので、磨るようにして窓に近付いた。

すると突然、パンツッ！という風船が割れたような音がしたと思ったら、スツと足元にさつきまで外にいた黒猫が現れた。

ぎよっとして数歩後退る。

窓をちらりと見れば、機械で開けたような円形の穴が開いていた。

えっ？なに？！

何が起こったのか理解できずに混乱している私を、それ以上は近づこうとはせずに見ている猫は、なんだか愉快そうに輝く瞳を歪めている。

棚にぶつかり、それ以上後退できなくなったわたしは、じっと、睨み付けるようにして目線を合わせた。

『クククッ、いい目だ』

突如聞こえた男の声に思わず窓を見るが、誰もいない。

『泣くかと思っただが、意外と根性すわってるねえ』

声が思いがけず近くから聞こえるので部屋を見渡すが、私意外誰も
……

まさか。

「…まさか、きみ…？」

私を見上げるそれは、先ほどよりいつそう顔を歪めて、ニタアと笑った。

……不気味だ。

『なんだ、叫ばないのか？つまらない』

と言いつつニヤニヤとしている猫、もとい化け猫に、自分ははたして夢でも見ているのだろうかと考えたが、窓から入ってくる冷たい風と足のかじかむような痛みが、そうでないことを伝えてきた。

「なにし…」

『いやあ、やっと見つけた光の子がおまえみたいなのでよかったよ。実際喚かれたりしたら面倒だし』

「…は？」

何言ってるんだ、この化け猫は。やっと見つけたって…光子？？
かずのこみたいに食べられるのか？

私を、食べるのか？

「生贄？」

混乱を極めたわたしの頭はなんだかとてもない答えを導き出したぞ？

だいたい、表に出ないだけで、私だってかなり怖いんだ。どんどん目の前の生き物が恐ろしく見えてくる。

『おお。よく分かったな。そんなもんだ。人間でも、賢い奴は嫌いじゃない』

マジで？

へたつと力が抜けてその場に座り込む。化け猫と視線が近くなってしまったが、もう一度立つ気力は残っていない。

それでも、睨み付けるのだけは止めない。

泣いて請うても結果は変わらないだろうし。

せめて、この恐怖に屈しないという意志だけは示さなければ。

『クハハハハッ！！気に入った！その態度！いいね、ホントに。向こうにやるのがもったいないくらいだ』

「……………ここでない所で殺すの」

口にだしてみても、戦慄する。

無理だと本能で分かっているが、何とかして逃げ出せないものかとかんがえてしまう。

『はあ？殺す？……………ああ、何も教えてないから勘違いもするわな。俺はお前を捕って食おうってんじゃないよ。まあ、この世界からは消えてもらうが』

「なにがちがうのよッ！」

思わず大きな声が出てしまった。

命が掛かっていると思うと、興奮してしまう。

『まあ、聞け。お前には俺の代わりに仕事をしてもらう』

……………なんだか、話のベクトルが思っていたのと違うようだ。

私の表情から困惑を読み取ったのか、いくらか穏やかととれる声音で話始める化け猫。威圧感バリバリだが。

『いいか。まず始めにお前には拒否権はないから、今後のために黙って聞いているよ』

「!っ…」

言い返そうとした言葉をすんでのところで飲み込んだ。

混乱するあまり、これまで感じていた恐怖が、怒りにとって変わリつつあり、私の沸点は異常に低くなっている。下手をすると、後先考えずに目の前の小さい化け物を投げ飛ばしてしまいそうだ。

落ち着け、私。君は本来そんな子じゃないでしょ。

『お前には異世界に行ってもらう。行くだけでいい。何をしろということではなく、均衡を保つために俺の変わりになる存在が、あつちの世界にあればいいだけだから』

「……へ?っで、え。なに?異世界って……………本気で言ってる?」

なんのファンタジーだよ。

『なに、信じらんねえの。しゃべる猫が目の前にいるのに?ホント変な奴だな』

……なにその心底理解できないって顔は。

『お前が信じようが信じまいが関係ないが、ここで納得しておなかいと後で苦労すると思うぞ』

それはまあ、そうだけどさ。

化けとはいえ、猫に言われても説得力ないし。

そもそも化け物と異世界とでは次元が違っだろうよ。

「…事実だとして、なんで私なの。私も化け猫になっちゃうってこと？」

『化け猫って……俺は猫じゃないぞ。お前と話をするためにこいつの身体を借りているだけだ。』

「じゃあ、あなたは何」

理解不能なことが多すぎて、軽くキレぎみである。

『俺は、世界を管理する者。いうなれば、神だな』

もう、いい。もうなにも言うまい。

どちらにせよ、私には逃れる術がないのだから。

腹立たしいことだが。

黙り込んで全くしゃべらなくなったわたしを見て、納得したと思ったのか、自称神（様）は話を続ける

『で、何でお前かといえば、俺の変わりになれる器がお前しかいないからだ。何せ神の代わりだ。力を付与するにあたってその力を受け止められるだけのでかい器をもってる人間なんてそうそういるものでもなくてな。いやあ、世界中探し回ったってようやくお前を見つけた時は、流石の俺も感激した』

今朝、あの時公園を通らなければ、こんなことにはなっていなかったんだろうか…自分の薄幸ぐあいに泣けてくる。

『何て嫌そうな顔してんだ。神の使いとして行くんだ、名誉なことだと思っただけ入れる』

暴君だ。神ではなくて悪魔なのではないだろうか？

悪魔に憑かれるようなことした覚えはないが。

「そんな、のう、つくしゅんッ」

緊張しすぎて忘れていたが、外気が入ってくるこの部屋で、自分の格好は薄すぎる。今更寒さを感じてぶるぶる震えてしまう。

『あ…人間相手にこんなとこで長く話すぎたな。俺も暇じゃない。風邪を引かれる前にさっさと行ってもらおう』

「えっ、ちょっとまって！！まだ向こうの世界のこととか、何も知らないし。心の準備……仕事も引き継がなきゃだしッ！！」

行くのは不本意だが、それで人に迷惑をかけるわけにはいかない。しっかり始末をつけてからでない……

『そうゆう面倒なのはいいから。気にすんな。神である俺が許す』
「何勝手なこといつ…」

『生活必要な言葉とかも与えといてやるから、まあ、適当に頑張れ』

そういうやいなや、私の足元に來た猫、いや神は、とんツと、窓に
穴開けたときのように前足で床を叩いた。
途端にそこから黒い穴が広がっていく。

それは、わたしの座る床までも侵食していき……

「…ッいあああああああ」

逃げる間もなく落ちて行つた。

？ 困惑と旅立ち（後書き）

ああ、落ちちゃった…

突っ走りすぎてちょっと作者もハアハアしてます。

？ 困惑と出会い（前書き）

一日3話はやっぱり飛ばしすぎかしら？

誤字、脱字などありましたら、どつぞどつ連絡をッ！！
感想もできましたら…

お願いします！！

？ 困惑と出会い

わたしは、それはもうジェットコースターが嫌い。フリーフォールなんて自殺の練習の間違いじゃないのかって。

…つまり、何が言いたいのかというと

「ぎゃあああ！…！しんじやうううツツツ！…！」

私は現在、あの場ではつさり殺された方がよっぽど楽だったのではないかというほどの恐怖を味わっているわけですよ。

確かに地上一階にいたはずなのに、穴から落ちたさきは雲より高い上空で、かれこれ3分近く落ち続けている。

やっぱりあの化け猫、始めから殺すつもりだったのか！

パラシュートなど付けているはずのない私は、涙と鼻水でぐちゃぐちゃになりながら、それでもなんとか落ちる速度を少しでも下げようと必死に四肢を広げている。

まあ、意味ないのは分かってるけど。ぐすん

気が高ぶっているせいか、こんなに恐いのに気絶することも出来きずに、落下の恐怖を最期まで味わなくてはならないようだ。

空気に圧迫されてまともに息をすることもままならない。
目なんてとてもとても。

かろうじて少しずつ緑の大地が近づいているのがわかる程度。

やばい、ホントに死ぬ。

今までお世話になった人達の顔を思い浮かべて、心のなかで恩返し
が出来なかったことを謝っておく。

オフィスの皆には、これまでに最悪の印象を残して消えることにな
るのね…

死んだら、元の世界に帰れるのかな。
そしたら、こんどこそ人様の役に立てる人間になりたいなあ。
その前にあの化け猫に復讐をば……

軽く現実逃避してる間に、落下速度が急激に上がっていくのを前進
で感じた。
もう地上はすぐそばだ。

どうやら、森に落下するようだ。鬱蒼としていてなんだか嫌な気を

放っているのがこの状態でも分かる。

人を巻き込まなくてすみそうなのは安心だけれど。

死んだあとの自分の身体がどうなるのか考えて、絶望が深まった。

空気を切るのとは違う音を聞き、私はせめて顔だけでも守ろうと身体を反転させ、頭を覆うようにして身体を丸めた。

もし、人が見つけたら、情けで土に埋めるくらいはしてくれるかもしれない。

轟音と共に、空気の圧迫が無くなったのを確かに感じた。

パラパラと何かが落ちる音が聞こえる。

緊張しきった身体を緩めて、顔をあげると、暖かな光が降り注ぎ、ほっと息をはいた。

全身がけだるいが、どうやら天国には行けたらしい。

そのうち本物の神様なり天使が来てくれるだろう。

しばらくはこのまま、恐怖から解放された喜びを味わっていよう。

……あ、来たようだ。ザッザッと近づいてくる音がする。

空飛んでくるわけじゃないんだ、よかった。

もう空中遊泳は勘弁してもらいたいもの。

と、目の前が急に暗くなる。まばゆい光を見ていたせいで、視界が霞んでよく見えないが、誰かが顔を覗き込んでいるようだ。

「おい、聞こえるか」

若い男の人の声。

ネロとパトラッシュを連れていった可愛いらしい天使ではないのね。

返事をしなければと口を開きかけた時、眼前の彼とは違う声が、やや後方から聞こえてきた。

「よかった、息はしているようだね。」

…息してる？

何言ってるんだろっ。

私はその言葉に不審感を抱きつつ、そつと上半身を持ち上げた。
すぐ側の彼が支えてくれているので、たいして苦ではない。

そして、ゆっくりと視線を周囲に向け……え？

なんで？？

目前に広がるのは白い雲でも、神殿の一室でもなくて、樹海のような怪しい森だった。

そしてなぜか、この周辺だけが木々の薙ぎ倒された空き地になっていて、陽の光が差し込んでいる。

「いきてる…？」

何で死んでないの？いや、よかったけどさ…いやいやッ！おかしい
だろっ！普通死ぬでしょう！！生きてちゃ変だろっ！！！！

頭を抱えて悶絶する私。

ふと、背中に当たる温かい掌を思い出し、ぱつと顔をあげた。

彼はぎょっとしたようだが、構わず私は今1番聞きたいことを口にした。

「私は生きているんでしょうかッッ！」

すると、さっきの不審発言をした彼が答えた。

「くははッ！今見えるものが真実なら、間違いなく君は生きているよ。でもまあ、僕もさっきの出来事は夢だったんじゃないかって気さえするんだけど。」

はて？さっき？？

「…で、実際のところ、どうなんでしょう？」

「お前は生きている。俺達も、お前のおかげで。」

.....
なんですと?!

？ 困惑と出会い（後書き）

やっと、異世界きましたよ！

主人公のキャラが定まっていらない……

まあ、今は混乱中だから。困惑シリーズだから。

あ。名前も出てない。

？ 困惑と生還（改）（前書き）

時間かかるね、文章書くのって!!

読んでくれる皆さん！ありがとうございます!!

誤字、脱字、感想ございましたらご連絡をお願いします!!

？ 困惑と生還（改）

暗い暗い樹海の森の、恐らく唯一日の当たっているであろうその場所、混乱を極めていた私だが、とにかく今は、落ち着け気を沈めろ、と自分に言い聞かせ、頭の中を整理することに全力を注ぐことにした。

「ホントに生きてるの？あの速度で落ちて？……あれ、ここ……怪我してないし…でも天使がい…って、えええッ！！大丈夫ですかッ！？」

自分の現状把握もままならず、今までそばにいる二人にさして注意をはらっていないかったから気がつかなかったけど、この二人、体中傷だらけだ。

すぐそばで片膝をつき、ずっと背中を支えてくれている黒髪の彼は、近すぎてよく見えないが、顔や肩に刃物で斬られたような傷があり、そこから血がにじんでいるし。

左やや後ろから覗き込むようにしてる金髪の彼も、立ってはいないけれど身体のおちこちに傷があり、髪は…血だろうか。濡れていて、結わいて右肩に流している部分が黒く染まっている。

見るからに重傷だ。

空から落ちた私よりも。

二人の状態を認識したとたん、生きているという実感が湧いてきた。天使がこんな傷だらけだらけでボロボロな訳ない。彼らは間違いなく生きた人間だ。

とはいえ、自分が生きているということへの安堵よりも、目の前の二人の怪我をどうにかしなければという思いが思考を支配して、とにかく怪我を確認しようと、思わず、隣の彼の右頬に触れた。

彼は一瞬ぴくつと肩を震わせたが、すぐに目を細め、頬にある私の手を包み込むように握った。

「ッ?!」

その動作に、なんだか危険なかりを察知した私は、とりあえず手を離そうと自分のもとへ引っ込めた。

なに、その不満そうな顔は。

とりあえず彼との接触は控えることにして、怪我の具合を詳しく見ようと立ち上がった。

ちよつとふらふらするけど、一人で立てたし、身体は無事のようにだ。こればかりは信じられないが。ここに超巨大クッションでもあったらまだ分かるけど、裸足で感じる地面は細かい砂で、私のいる辺りを中心に若干くぼんでいる。

まだ片膝で座る彼を観察しようと身体をむける。

すると、後ろの金髪さんがさらに近づいてきた。2、3歩だが、ふらつきも見られない。怪我は見た目ほど大事ないようで一先ず安心した。

金髪さんは黒髪さんの方へ手をのばすが、彼はその手を避けると自分の足ですくつと立ち上がった。

肩から胸にかけての傷が酷い。さすがにこちらは立ったからといって安心出来ない。

直ぐさま応急処置をしなければと思い、再び手をのばすと、黒髪さんにがしつと手首を掴まれた。

……しまったっ！うかつだったぜ（どしたの？）

「離してください。こんなとこだけれど、とにかく応急処置だけでもしないと」

「……」

「ちよつと……」

一生懸命引っ張るのだけれど、がちり掴んだ手はびくともしない。

無表情で見つめてくる深海のような碧の瞳があまりに綺麗で思わず息を飲んだ。

「そのくらいにしておきなよ。初対面でそんなことしたらよけい怯えられちゃうでしょ？」

この場には少し不釣り合いなほど明るい調子で、金髪さんが彼を咎める。

その言葉に、黒髪さんは渋々といったふうに関手を離れた。

私は、別に痛くもない手首を何度もさすった。

「この度は、危ないところを助けて頂き、感謝します。私はフィルメス・ウァン・カーノイト。貴女のお名前を教えてくださいませんか。」

「あつ、えと、雪です。君沢雪。」

フィルメスは、先ほどとは打って変わり、お腹の辺りに片拳をつけて礼をした。いかにも外国人といった（実際には異世界人！）風貌の彼に、その姿勢はとてよく似合っていて、感心した私は吃りながらも、なんとか笑顔らしきものを浮かべて答えた。

「ユキ」

早速名前を呼んできた黒髪さんに視線を移した。

「ジークだ。」

素っ気なくそれだけ言うと、私のぼさぼさになってしまっているで

あろう髪をひと房持ち上げ、そこにキスをした。

頭一つ分以上高い彼が軽く屈んで、あの瞳を向けたままそんなことをするものだから、動揺して逃れようと彼の胸を押してしまった。

「っあ…」

乾ききっていない血を左の手の平に感じ、自分のしたことに青ざめる。

しかし、当の本人は痛みに呻く訳でもなく平然と、再び私の髪に触れようと手をのばしてくる。

なんともなかった様子に安心しつつも、後ずさって、その手から逃れる。

「…」
「…」

無言の攻防が続けていると、フィルメスが再び口を開いた。

「ユキ、貴女はどうしてこんなところに？先ほどの様子を見るかぎり、我々を助けにきたという訳でもなさそうですし。ユキという名も珍しい。何処の国の術師でしょうか？」

「術師？私はそんなものではありません。…実は、私自身、どうしてもここにいいのか全く分からないんです。」

なんのために来たのかは一応聞いたが、始めから殺すつもりだったとすれば、あの説明の内容などの多くは無意味だ。

「どういうことでしょうか。」

「あ、敬語なんてやめてください。……えつとですね、信じてもらえないとは思いますが……突然上空に（・）落とされて、死を覚悟したのですが、このとおり。なぜ、生きているのかもさっぱり理解できてないんです。」

私の言葉を聞くと、フィルメスは顎に指をあてて黙り込んでしまった。

どうでもいいけど……ジークさん、いい加減離して。

てか、離れてよ……

「お、お二人こそ、何故、そんな大怪我を？それにさっきから、私が助けたとかなんとか……」

「ああ、私たち……いや、僕たちはこの森に住まう魔物を討伐しに来ていたんだ。だけれど、その魔物が報告されていた情報よりも数段力が強くてね。もう少しで逆にやられてしまうというところに、君が空から降ってきて、瞬殺してくれたというわけさ。あんなの始めて見たよ。一体どんな魔法を使ったんだい？」

「魔法……ほんとに、なんでこうなったのか、私には……」

異世界らしいワード。とんでもないところに落としてくれたな。化

け猫。

「そこからか… ホントになにも分からないのかい？」

「はい…」

それ以上何も言えなくて俯くと、砂にまみれた自分の足が見えた。

空から落ちてきて、魔物を一瞬で倒した身元不明の私…怪し過ぎる。

裂かれていてボロボロだけど、彼らの着ている服は軍服のように見える。フィルメスの先ほどの礼をみても、いくら異世界とはいえ一般人の所作とは思えない。

このままでは、いくら命を助けたとはいえ（そんな自覚はないが）、捕えられてしまうという可能性も…

「うわッ」

悲観的だが現実味のある想像に青くなっていると、突然、ジークが私の肩を抱いて引き寄せた。

「こいつは城に連れて帰る。」

「へっ？城？」

「ああ、僕たちはカルディナ王国の騎士なんだ。」

彼は一度決めたら何を言っても聞く耳持たないんだ。困っちゃうよね。

でもまあ、いいか。

ねえユキ。君は僕たちの恩人だ。

お礼がしたいから一緒に城までいつてくれるかい。」

頭をよぎった最悪なシナリオ通りにはならなかったが、フィルメスの否を許さない問いと笑みに、いやーな予感がした。

私が答えられずにいると、ジークが肩に置いた腕を下ろして私の手を掴むと、スタスタと暗い森に向かって歩き出した。

「いつまでもここにいはられない。この森には他にも魔物がいる」

「ちよっ…ッい」

軽く引きずられるようにして歩き出したが、いかんせん私は裸足だ。凹みの中心はそうでもなかったけれど、周囲には鋭利な小石や木片が至る所に落ちていて、どうやら踏んでしまったようだ。

私の声に振り返ったジークは、何を思ったか、私の膝のうらに手をまわすと、そのまま私を持ち上げた。

お姫様抱っこというやつだ。

「ちよお…やだ、怪我！！降ろしてください！」

「…」

ジークは私の身体が密着しないように隙間を開けて、器用に抱っこしている。

この怪我人の何処にそんな力が残っているのか。

彼を止めてもらおうと後ろを振り向くが、フィルメスはやれやれと

肩を竦めると、黙ってついてくる。

私は、そんな彼に恨めしげな視線を送ったあと、これ以上負担をかけないように、そっとジークの首に腕を回した。

森に入ると、光が途絶え、様々な生き物の鳴き声が聞こえてきた。

魔物、いるなあ……

ふいにそう思った。

ほんの少し、腕に力を込めると、それに気付いたジークが頭のとっぺんに唇を寄せる。

……もう降ろして。

180?はあるだろう彼に抱えられているので、普段よりも目線は上なはずなのだけれど、緑に染められた樹海のようなここでは、あまり実感できない。

しばらく行くと、ジャカジャカと金属が擦れるような音が重なるように聞こえてきた。近づいてきているようだ。

魔物だろうかと一瞬思ったが、ジークもフィルメスも動かない。はて。

木々の隙間からちらほら見えてきたのは、鎧姿をした者や剣を手に持った者…人間だ。

「「隊長…ッ!!」「」「副隊長…ッ!!」「」

皆、叫びながらこちらに向かってくる。

この二人、やっぱり偉かったのか。

「隊長、ご無事でしたか。」

「副隊長もご無事でなによりです。」

ジークはあとかなんとか素っ気ない返事をしていたけれど、フィルメスは目的の魔物のことなど、詳しく集まってきた隊員達と報告しあっている。

どうやら、手分けして魔物の探索をしていたところ、爆発音とともに閃光が見えたので、急いで向かってきたらしい。

「隊長、その娘は」

びくっ！

なるべく小さくなって、気配を消そうと努力していたけれど、やっぱりダメか……だよな

この体勢、恥ずかしくていたたまれない。

「その子は、僕らの命の恩人なんだ。一緒に城へ連れて帰るからそ

のつもりで。」

皆、よくわからないといった風に怪訝そうに私を見たが、ジークが再び歩き出したので、それ以上の追究はなく、隊員達も、ジークとフィルメスを囲うようにして歩き出した。

20分程して、ようやく森を抜けると、そこには残りの隊員と十数頭の馬、それと2台の幌馬車が待っていた。

皆、それなりに疲弊し怪我也負っていたが、やはり、目的の魔物と戦った二人が飛び抜けて重傷に見えた。

幌から包帯等をとってきた隊員のひとりがジークに駆け寄ってくるが、ジークはそれを拒絶した。

そして居並ぶ馬の中でも一際毛並みの美しい黒馬に近づき、私をひよいとその馬に跨がらせると、自身も身軽で無駄のない動作で後ろに跨がり、私の腰にきゅっと腕を回した。

「このまま、すぐに城へ帰還する。」

一言そういうと、馬の手綱を引き、森に背をむけた。

各々、怪我の手当をしようとしていた隊員達は、呆然とその姿を見ていたが、次の瞬間には弾けるように馬に駆け寄ると、隊長の背中を追った。

副隊長たるフィルムスも苦笑をひとつもらすと、怪我をしているとは思えない動作で馬に飛び乗るり、ジークに追い付かんと馬を走らせた。

？ 困惑と生還（改）（後書き）

やっと、名前出せたよ。

なんだか、始め考えてたあらすじと違ってきちゃった？！

あらすじのほうを訂正させて下さい。

ブレブレの作者ですみません！！

？ 馬上にて（前書き）

2か月以上空いてしまいました（汗）

待ってくれていた方、申し訳ありませんっ

内容はほとんど前進していませんが、投稿します。

相変わらずの稚拙文ですが、よろしく願います。

？ 馬上にて

景色が飛ぶように移り変わっていく。

あれよあれよという間に馬に乗せられ、気がつけば、さっき落ちた森はもう豆粒のように小さくなっていた。

後ろでがっちり私のお腹に手を回している彼のせいで、たいして見えるわけでもないけれど、何となく不安になって繰り返し後ろを振り返ってしまう。

「あまり乗り出すな。」

そう言つて、さらに腕に力を込める彼。
ジークと言ったつけ。

ほんの1時間程前にあつたばかりだが、なんとというか…近い。

私を馬まで運ぶ時は、極力自身の傷口に触れないように気を使っていたように思うのだが、今は、彼のお腹と私の背中らびったりとくっついている。

離れようと、ちよつともがいてみるものの、傷口に障つたらと思うと、結局彼にされるがままになってしまう。

顔色もいいし、何より二人乗りでここまでの速度を出して馬を走らせることが出来るのだから、なんてタフな人なんだろうと感心する一方、ここはやっぱり無理やりにも馬を止めさせて処置を受けさせた方がいいのではないかと思ひ悩んでしまう。

もし彼が突然失血なんかで倒れたら、助けるどころか操縦出来ない私も落馬することになるのだが、そのところ分かってるのだろうか。

…ところで、あんなに出血するほどの大怪我を負うなんて、魔物つてやつはどれだけ凶暴な生物なんだろう。

その魔物を木っ端みじんにしてしまうほどの衝撃で落下して生きている私は、もつと何なんだろう。

む、このまま城とやらに連れていかれてしまつて果たしていいものか…

お礼をしたいと言っていたし、不審人物として即刻牢屋にぶち込まれることはないと信じているが、なんと言つてもワタクシ、何質問されてもまともに答えることが出来ないのだ。

あの化け猫が本当に神様（えー）だったとしても、その話を信じてもらうとかいう以前に、私自身がほとんど理解できていないのだからもうどうしようもない。

化け猫との一件が私の妄想でも夢でもないとなると、アパートの一階から一転、上空に飛ばされて、地面に激突したのに生きてるという点では、化け猫になんらかの超能力的な何かがあることは認めざるおえない。

だからって、今おかれている状況を化け猫とフィルムメスから聞いたそのまんま受け入れてしまえるほど、私の頭は柔らかく出来ちゃい

ない。

お城があつて、騎士がいて、魔法に魔物まで存在するって？

あんまりびっくりな急展開で気付かなかったが、まだ完全にここが異世界だと言い切れるものを見ていないのだ。

思考が柔らかければ納得できるのかと言われるればそれも違うと思うが、とにかく、ここが異世界かどうかは置いて、彼らの私への不審感が敵意に変わらないように、慎重かつ早急に情報を集めなければ。

その上で、自分の身の振り方を考えなければならない。

後方から、馬が駆けてくる音が聞こえてきた。

思考をいったん中止して後ろを振り返ると、フィルメスが乗るこれまた黒毛の美しい馬を先頭に、森の外で見た十数頭の馬がこちらに向かつてきていた。

私が見ていることに気付いたフィルメスが大きく手を振ってくる。

なかなかのスピードを出しているにもかかわらず、その動作にまったく危なげな様子はない。

金髪の彼が馬に乗っている姿というのは、怪我をして血や土で汚れているとはいえないへん様になっていて、王子様を連想させる。

今の状況でのこういったもの（ファンタジー関連）は、まったく洒

落にならなくて、思わず顔が引きつるが、親しげな態度はうれしいので、私も出来る限り手を伸ばしてそれに応えた。

追いついてきた隊員たちは、入れ替わり立ち替わりジークの乗る馬の少し前方へ出て、こちらをうかがうような視線を向けてくる。

その度に、さあっと顔色を変えて後方へ戻っていった。はて。

しばらくすると、ジークを先頭にした隊列が整い、規則正しく蹄が地面を蹴る音が響く。

いつの間にか、あの不気味な森はまったく見えなくなっていた。そのことになぜか言い知れない不安を感じ、それと同時に腕にまわされたジークの腕と背中に感じる熱に安堵して、一時私は瞼を閉じた。

？ 王宮到着（前書き）

すつごく久々です（汗）

読んでくださる方が一人でも居てくれたら幸いです。
よろしく願います。

？ 王宮到着

浮遊感を感じ、目を開けると、デジャブな光景。

真上にジークの顔 肩越しにはフィルメス… またもやお姫様抱っこですか。

どうやら、うつかり眠ってしまったらしい。

結構図太い神経してたんだなあ、私。知らない土地、初対面の男の人の腕の中で安心して爆睡とか… どんだけ。

周りを見渡せば、ついさっきまで乗っていた黒馬が手綱を引かれて厩へ連れていかれているのが見えた。

他にも見覚えのある人達何人かがこちらにちらちら視線を送っていて、何か言いたげにしているのに気が付いて、恥ずかしいというより、居たたまれない気持ちになった。

すぐさま降ろしてもらおうと声を出そうとしたところで、私は硬直した。

ここはどこだ？ はい、城です。

すでに敷地内に入ってしまったために、見上げたところで目の前の建物の外観をすべて把握することは出来ないが、もう、大きさとか薦も這っていない白い壁とかそんな目に見えるモノではなく、なんかこう… 威圧感とか雰囲気？ 分かります。

あー…、やばい、やばいぞお。

不覚にも、移動中眠ってしまったために、身の振り方を何も考えてない。

もういつそのこと、流れに身を任せてしまおうかなあ…

ジークは全く私のことを降ろす気はないようだし。

フィルメス、目で訴えたところであなただけは助けてくれないのでしょうね。はあ。

意識をあさつての方向へ飛ばしている間に、あれよあれよと裏口つていうか埃なんかを払う屋根だけがあるスペースを抜けて、あつという間に入城してしまったようだ。

すれ違う兵士さんや下働きらしき人達が、ぎよつとしたように廊下の端で固まっている。

そりゃね、裸足の女を抱えた傷だらけ泥だらけの宮廷騎士？が現れたら驚くよね。

加えて、抱えられた女は白丁にグレーのジャージ。ここでは非常に浮いている。

途中、上質そうな衣装を纏ったオジサマ集団ともすれ違ったけど、誰も声をかけてこなかった。

地位のあるの人たちに見えたんだけどな。

城内の風紀を著しく乱しているであろう私たちを咎めるでもなく、目を凝らすまでもなく大怪我の二人を気遣うでもなく。

ただ、ビビってる。

皆、二人の姿や、私のＴシャツにべったりついてるジークの血が怖かったのかな？

それは申し訳ないなと思う一方で、良かったなとも思った。

こんな状況でもなきや、いかにも不審人物な私がこんな所に入れるはずもないから。

望んで来たわけではないけれど、他に行くあてもない以上、ジーク達についていくのが今の時点で一番安全そうな選択なのではないだろうか。

助けた云々が彼らの勘違いだったとしても、早々手荒な真似はしないだろうし。

入り組んだ王宮（暫定）内をどのくらい進んだだろうか。
ジークがとある扉の前で止まった。

引き戸だったその扉を勢い良く足で開いた。

フィルムスに開けてもらえばいいのに…

部屋に入ると、微かに消毒液の匂い。医務室のようだ。

誰もいなかったけれど、ジークは別段気にした風もなくベットに近づくと、私をそつとそこに降ろした。

「あ、ありがとうございます。」

やっと腰を落ち着けて、ふうっと息を吐くと、今度はおもむろに足を持ち上げられた。

な、なんっ！

ジークはベットの脇で片膝をついて、じつくりと私の足の裏を検分している。

「傷はたいしたことないようだが、痛むか？」

口調は平淡だが、とても心配くれているように感じられた。

ジークは覗き込むように私の顔を見ってくるので、碧の瞳に私が映っている。

な、なんか照れるな。

なんとなく気まずくて顔を逸らすと、ジークがベットに手をつき、おもむろに顔を近付けてくる。

そんな近づいて確認しなくても、足の裏をちよつと切った以外は無傷ですよー？

ジークのつくる影が顔を覆ったその時。

おほんっ！

「なんのために此処まで連れて来たの？感心しないな。」

フィルムスが呆れたようにこちらを見ていた。

ジークはそれに返事はせずベットから離れると、フィルムスがいつの間にか手にしていたガーゼと茶色い瓶をひったくった。

それから再びベット脇にいくと、瓶の中身を染み込ませたガーゼで私の足の裏を丁寧に拭ってくれた。

こんなことしてもらっちゃって申し訳ないなと思いつつ（どうせ離してくれないから、もう抵抗とかしないよ？）

ひんやりして気持ちいいーなんてのほほんして、はっとした。

「二人とも大怪我ッ！！」

そうだ、そうだったっ

おいおい、こんなことしてる場合じゃないよ！

二人がピンピン動いているからうつかりしてたけど、早急に治療しなきゃでしょ！？

ジークさん、私のことなんか放っておいて、まず自分のこと心配しようか！

内心アワアワしつつ、取りあえず足を離してもらおうと必死になって足を引き寄せる。

「離してください！

私は大丈夫ですからっ！あなたの方がよっぽど大丈夫じゃないですって！

今は、きっとまだ興奮してるから痛みに鈍くなっているだけなんで

すよ。

失血だつてたくさん…」

「問題ない。傷口も塞がっている。」

「今は血がでなくなつて、そんなの！

いつまたパツクリ傷口が開くか分からないじゃない！」

「まあ、そんな…」

「フィルムスさんですよ！

つつ立つてないで、ベットに横になってください！」

さあ、早くっ！！

と、やや興奮して大の男二人を怒鳴りつけていると、バタバタと数人分の足音が聞こえてきて、ばあんっ！！と扉が開いた。

「おお、お怪我を……っ」

白衣のを着ているので医師のようだが、全員走ってきたようで、息も絶え絶え。

言葉をうまく紡げないようだ。

その様を見ていたフィルムスが、片手を頭に乗せて苦笑いする。

「せっかく迎えに行つてくれたのに悪かったね。
すれ違つてしまったようだ。」

「いいえ！

それよりも、早速治療を。

現地では、手当てもせずはこちらへ戻られたとの事。

いくら貴方様がたでも、それほどまでの怪我では見過ごせません。
さあ、こちらに。」

復活した医師たちが、手早く寝台と器具の準備を整え、二人を促す。
さすがに医師には逆らえないのか、ジークも手を離して、大人しく
指示にしたがった。

うん、よしよし。これでひとまず安心だ。

あ、お気遣いなく。
私は部外者ですから。

…っあ

？ 治療（前書き）

あんまり進んでないかな？

読んでくれてありがとうございます。

？ 治療

ぼろぼろの衣服が缺で裁たれ、ジークとフィルメスの上半身が露わになる。

上に着ていた濃紺の詰め襟の下のシャツは、血でべっとりと黒く染まっていた。

今まで普通に動いていた事が不思議なくらいの出血量だった。

医師たちは、脱がす前からある程度予想ができていたようで、治療の手を止めることは無かったが、表情が一層険しくなったように感じられた。

大判のガーゼで慎重に血を拭っていく。

当の二人は、さほど痛みは感じていないようで、部屋の隅でちっちやくなってる私に余裕の表情で視線を送る。

フィルメスに至っては、笑顔で手を振ってくる。

先ほどシャツを脱いだ時にに付いてしまったのか、手のひらは血で真っ赤だった。

勘弁してください。

やや視線を逸らして治療を見守っていると、突然医師たちの手が止まってしまった。

皆、驚いたように口をぱかと開けたまま固まっている。

怪訝に思っ、私は椅子から少し腰を上げ、二人の身体を覗き込ん

だ。

血は綺麗に拭き取られ、筋肉質な逞しい胸板が見えた。

……。

……、あれ？

おっかしいな…。

二人の上半身には、至るところにうつすらとピンクの傷痕が見られた。

その中には結構大きなものもあって、本当に騎士として（かどろかは信じたくない気持ちもあるんだけど）戦ったりしてるんだなあ。と思わされた。

んだけど、

肝心の、森で受けたらしい傷がない。

ほんの数時間前に負ったはずの傷が、二人の身体にはどこにも見当たらなかった。

「へっ…？」

間拔けな音が私の口から漏れた。

あ、ケガ大丈夫だったんだねよかったーなんて言えない出来事に、頭の中が？で一杯になり、それ以上言葉が出てこない。

医師たちも暫く動かず、奇妙な静けさが医務室を包んだ。

「もう、いいか。」

ジークが寝台から立ち上がり、フィルムスが伸びをするように両手を軽く上げた。

それによって、やっと部屋の時間が動き出す。

「ままま、魔術師長殿をよよ呼んでこいっ！」

年配の医師の声に、弾けるように一人が廊下へ飛び出すと、他の医師たちもわーわー騒ぎながら行動を開始した。

今にも私の腕をとって部屋を出ていこうとしていた二人を寝台に引き戻し、室内を走り回り、寝台脇のカートを引き倒したりと、さっきの静けさが嘘のように騒がしくなった。

瞳を爛々と輝かせ、頬を赤く染める医師たちは興奮し、熱気がムンムン立ちこめはじめる。

その姿は、近づいたらいけないような迫力があって、非常に怖い。

私はそれを、扉の脇で呆然と眺めていた。

++

しばらくして、部屋を飛びだしていく数人の医師と入れ違うようにして、真っ白な顎髭を蓄えた老年の男性が入ってきた。

後ろには、最初に出ていった医師。

彼が”魔術師長”なのだろう。

彼らが入室すると、医師たちは立ち止まり頭を下げた。部屋は床には薬品のが転がってたりしてちよつと危険だし、決して目立ちたくないで、私はさっきまで座っていた隅の椅子に再び座って置物の如くじつとしていることにした。

魔術師長なおじいさんは、二人の腰掛ける寝台に近づき使用済みのガーゼやシャツを目の端にとらえつつ二人を観察すると、信じられないとでも言うように目を見開き、息を呑んだ。

背後の医師たちは、今だざわざわと落ち着きがない。

おじいさんはおもむろにジークへ手を伸ばすと、肩口から胸に掛けて、傷が在るべき場所をそつと辿った。

「なんと……」

気を落ち着けるように大きく息を吐き出すと、声を発した。

「間違いない…。

俄かには信じられないことじゃが。

疲れておるのは十分承知しておりますじゃ。しかし、お二人とも、何があったのかお聞かせ願えますかの。」

その言葉を受けると、二人は同時に私に視線を向けた。

すると、釣られるように部屋にいた全員が私を見る。皆そろって、今気が付いたみたいな顔をしている。

治療が優先だということ一旦放置されていた私は、なるべく気配を消すように努力していたのだが、そこまで効果があったとは。

単に私の影が薄いだけとか、そういう突っ込みはひとまず置いておくとして。

「そなたは…」

ほほっ、やばいぞ。

とうとうやってきてしまったっ。

服装だけでも私は十分不審者だ。

哀しいかな、綿とポリエステルで出来たジャージはここでは非常に浮いてしまう。

やましい事は何もないが、少なくとも日本ではないこの地で、身元を証明出来ないのでは不法滞在で捕まってしまうかもしれない。

あー、うー、と血の気が引く思いでなんとか言い訳をしようとするが上手くいかない。

その間にも、おじいさんが医師たちの間を抜けて近づいてくる。

おじいさんが何を考えているのか分からなくて、怖い。

ただ、その瞳はさっきまで見ていた人たちと同じようにギラギラしていて…

軽いパニックで動くこともできずにおじいさんを凝視していると、横合いから腕がによきつと出てきて私の引っ張り起こし、すぽっと包み込んだ。

「大丈夫だ。」

いつの間に私を抱き締めるジークが優しく頭を撫でる。

フィルムスもすぐ側に来て、肩に手を乗せると、安心するような微笑みをくれた。

緊張の糸が切れたように腰が抜けてしまった私は、ジークにもたれかかるようにして息をついた。

顔を上げて二人の目を見ると、力強く頷いてくれた。

そつだよ、二人が連れてきたんだから、何か適当な理由を作ってくれば取り敢えずは。

「彼女の魔術に私達は助けられ、今ここにいます。」

「傷も、雪が癒したんだ。」

……。

えと、あの、さ……。いくらなんでもそれは無理があるように思うんだ。

森で話した時にも否定したじゃん？

寝てなんかいないで、せめて二人の誤解だけは解いておくんだつたよ、

う
え
ん。

？ 治療（後書き）

ジークもフィルムメスも今だ上半身裸です。

包帯もしておりませんので。あしからず。

？ 報告（前書き）

お久しぶりです（●^o^●）

サブタイトルが相変わらず微妙です（汗）

？ 報告

+++

とくに治療すべき怪我も無く、体調も至って良好という事で、私たちはおじいさんの執務室に場所を変えることになった。

着替えを各々用意してもらって、それに手早く着替える。

本当は、風呂に入るなりして拭いきれなかった汚れを流してから改めて、って方がいいのだけれど、私の処遇含め早急に話し合う必要があるとの事だった。
ホント、すみません。

私が念のために足に包帯を巻いてもらってから、

医師たちの好奇の目に見送られて医務室を後にする。

ジークが私を再び抱き上げようとしたので必死に抵抗して、患者さん用のスリッパを借りた。

今更だけど、あの化け猫に落とされてからずっと裸足だったんだよね。

ジークに手を引かれて歩く廊下に敷かれているライトベージュのカーペットがとても高級そうで、汚したりしたらえらいことなので、喻えスリッパでも有難かった。

というか、底が木製の靴はまだ流石に痛いかなって思うし。

ジークがすごく心配そうな目で私を見るから、顔には出したくないんだ。

申し訳なくも歩調を合わせてもらい進んでいくと、重厚そうな扉の前に来た。

待ち構えていた兵士におじいさんが片手を上げて合図すると、さつと扉を開けてくれた。

そそくさと後が続くが、通り過ぎるときに兵士さんにぎよつとしたような目を向けられたような気がした。

フィルメスがご苦労様と声を掛けると、我に返ったように胸に拳を置いて礼をした。

カッコいいー

部屋は二十畳ほどで、扉正面の一番奥に紙の束や本がどっさり乗った机があり、その前にはローテーブルとソファーが向かい合わせに置かれていた。

おじいさんは私達をそこに誘導すると、向かいのソファーに腰を下ろした。

私は当事者とはいえ、二人に挟まれるように座らされ、なんとも居心地が悪い。

ソファーはふつかふかで体が沈んでしまい、格好がつかないのがまたなんとも…。

背が隣の二人よりもだいぶ低い、私より年下だろう少年がお茶を用意してくれ、彼がおじいさんの後ろに立ったまま控えると、ようやく会談？が始まった。

「おほん。お嬢さん、まずは自己紹介を。」

わしはここ、カルディナ王国の宮廷魔術師団長タグザード・クロエと申す者じゃ。息つく間もなくすまんかったな。」

「いえつ、こちらこそご迷惑をお掛けします。君沢雪です。よろしくお願い致します。」

やっぱり、おじいさんは魔術師長だった。こんな部屋まで与えられるということは、師団長の肩書きはそれなりの地位を持つのだろう。

私は深々と頭を下げた。

別に、長いものに巻かれとこうとかそんな気持ちからではないですよ？

あくまで、年長者に対してのマナーです。

「そんなに畏まらなくても構わんよ。」

雪殿、そなたにはいろいろと尋ねたいことがあるのじゃが、協力してくれるかの。」

「はい、もちろんです。」

身元を証明できるものを持たない今の私に、話を聞いてもらえる機会を設けて貰えていることがどれほど有難いことか理解しています。

「ただ、私自身が自分の身に何が起こったのか、ほとんど分かってなくて。」

取り敢えず、フィルムスが森であつた出来事を説明してくれることに。

討伐任務そのものは、魔術師長サマもご存じだったみたい。隊の中にも魔術師団から派遣された人が数人いたそう。

——わたしの出現で、魔物が跡形もなく消し飛んで（えー？）、周辺を包んだ光と土埃が収まり現状を確認しようと即座に動き出すとしたときには、それまで負っていた傷は癒え、痛みも引いていた。

フィルムスの話は端的かつ分かりやすく、なんだか報告書を読んでいるかのような感覚。

ファンタジックな要素を多大に含んだそれを、わたしはどこか他人事みたいに感じながら聞いていた。

なのに

——上空から眩い^{まはる}光の玉のようなものと共に落ちてきたのが美しい人型をしていると分かったとき、
天からの使いかと思いました——

飲むでもなく両手で持っていたカップを危うく落とすかと思った。ずっとジークの手が伸びてきて事なきを得たけれど。ちょっと中身がジークの手にかかってしまったが、彼はピクリとも動じなかった。

良かった。

それにしても、な、なにを言ってるんだ、この人。この場でいうこと？

あ、あ、柔らかな笑顔で身体ごとこちらに向けてそんなこと言われても…

口の端がひくつくばかりだ。せめて心の中に留めておいてほしかったよ。

魔術師長サマは顎に手を当てて黙考しているようで、今のフィルムズの発言についてはノーリアクション、ノーコメント。

お茶を持ってきたくれた少年はずっと無表情でこちらを見ているし…

…なんだかアウェイな気分です。

？ 報告（後書き）

膝の上に置かれた雪の手を、ジークは離していません。
本人はちよつと動揺してるので、気づいていないようですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8409p/>

プラチナ

2011年9月12日00時35分発行